

## 正義

美濃中学校 2年 那須 優花

「僕は正しいことが苦手なんだ。」

何もかもを見透かすようなつめたい目で、瀧が呟いた。指定されたダサイ白シャツ、膝を隠すくらい長い黒いスカート、決められた日程にそつてなる安っぽいチャイム。

「万智さんの思う正義って何。」

正義とは何か。万智は即答した。

「正しい考え。ルールとか。」

先生なんかがつけた重たい鎖の向こうに広がる屋上の空は希望に満ちたような自由な青空だと思っていた。

「ルールが正義か。あんた、つまんないね。正義が正しいとは限らなくない?」

こいつは嫌いだと万智は思った。だいたい瀧が授業中にふらつと教室を出て行ったきり戻ってこなかったので、クラス委員の万智が連れ戻しに行かされたのだ。クラスには瀧の友人らしい人はいなかったのだが、変人という点では有名だったので「あいつならたぶん屋上。」と案外あっさりと聞くことができた。

立入禁止の看板を無視するのは気が進まなかったが、さつさと連れ戻せば問題ないだろうと軽い気持ちで鎖をくぐったのだが。

「ねえ、はやく戻ろ。屋上だなんて先生に見つかったら怒られる。こんなの校則違反だよ。」

「だよね。君の正義はルールだもん。」

瀧は万智をからかうようにケラケラと笑う。

「だったら、あんたの正義って何。私は立場的にルールが大事なの。」

「僕はね、正義の味方とかいうキャッチフレーズのヒーローアニメが嫌いなんだよね。」

「はあ?」

淀んだ空とは正反対の瞳で瀧は続ける。

「ヒーローが街で戦闘するシーンを見てふと思ったんだ。街はぐちゃぐちゃで、住んでる人にと

つては大事な家を壊されたりして。なのに悪者に勝った、平和が保たれたと言うんだ。街の復興は？ けがをした人はいないのかな？ もつと言えば悪者だつて悪者なりの正義があるはずなのに、そんな背景は分からないまま。ヒーローにしかスポットライトはあたららない。」

「でも、街が危機にあるなら多少は仕方ないよ。やられっぱなしの方が被害は大きいし。」

思わず万智も瀧の隣に座つて語っていた。たかが、アニメの話だ。それに気づかないくらい夢中だった。

「なるほど、守るための代償ね。正義つて難しい。大人になるにつれて分かるようになるものかなあ。早く大人になりたい。」

「なら、授業戻つて中学を卒業しなきゃね。」

万智の言葉に感心したように瀧はにんまりと笑い、二人で急いで教室へ戻った。

「瀧、どこで何してた。説明しろ。」

ゴドンと先生が教壇を叩く。

「考え事です。正義について。」

先生が笑うのにつられるように周りでも冷やややかな笑いが起こった。

「ルールを破つてした事がそれか。まっすぐなところが瀧の長所だが、社会には理不尽がいっぱいだ。自分を抑えることや考えを殺すことも必要だ。それが大人の世界だ。」

瀧の目つきが変わる。教室は静まり返り、声だけが空気をゆらした。

「それが大人になるということなら僕は大人になりたくない。」

眉間に深いしわを寄せ、口を開こうとする先生を遮るように瀧は失礼しますと残して教室を出て行った。無意識のうちに万智は瀧を追いかけていた。彼がどこか遠くへ飛んでいつてしまふ気がしたのだ。辞書で正義と引くとたつた数行で記してある。正しい意義または正しい解釈。その言葉は正しい。でも違うのだ。言葉としては正しくても多様で可能性を秘める人間にはあてはまらないのだ。万智は廊下は静かにと書かれたポスターを追い抜いた。足を鳴らし、風をきる。正義に答えは存在しないのだ。万智は屋上の扉の前でスカートを二つ折った。膝が出てすつとする。

「瀧くんー！」

勢いよく空けた先には変わらない淀んだ空がある。

「クラス委員の万智さんが授業すっぱかしているの?」

「そんなのいい。正義には答えがないってことが分かったの。」

うははつと笑い声を上げ二人はコンクリートに寝転んだ。

「答えがない、が答えね。こんな青春っぽいワンシーンは普通青空だろ。」

万智の叫びに灌もる。

「理不尽上等! くもり空が似合ってるよ。今の俺たちには。」

「どうして?」

前より短くなつたスカートが風になびく。

「これから晴れていくからさ。」

そう思えばこのうつとおしい空も悪くない。

大人がつけた鎖の向こうには可能性にあふれた美しい曇り空が広がっていた。